願成寺報

平成二十三年三月十四日

〒四四〇・〇八一二　豊橋市東新町二十八番地
☎ 〇五三二・五二・九六〇一

足の悪いお婆さんがお参りに来られます
耳が遠くなった方が法話を聞いておられます
それぞれに問題を抱えた方々のお念仏の声が聞かれます
お寺の法座はそんな機会だと思います
仏様の前でそれぞれの今を見つめ直す時間
集まった人々の姿の中に　伝え合うべき大切な事柄が顕れています

■　春季彼岸・永代経のご案内

左記により勤修いたします
準備不足で心配ですが　頑張って勤めて参ります
今回は、大河戸悟道先生にお話いただきます
万障お繰り合わせて　お誘い合わせてお参り下さい

三月　十九日（土）午前十一時　法要のみ
二十日（日）午後　一時　法要のみ
二十一日（祝）午前　十時　法要・法話
午前十二時　お斎（粗飯準備いたします）
午後　一時　法要・法話
法話　牛川町　正太寺
大河戸　悟道　師

「仰げば尊し」

私達にとって卒業ソングの定番は『仰げば尊し』でした。
最近、歌われなくなっているそうです。
他に良い歌があるというよりも、
歌わない・歌わせたくない喧しい議論があるようです。
とても残念に思います。
一方で『無縁社会』が深刻化しています。
二つの社会現象は無関係だと云えるでしょうか？

仰げば　尊し　我が師の恩

「恩」は、仰いでみて、やっと知られるものでした。
「私の思い」を主にしていたら気づかず過ぎてしまいます。

先生の、親の、祖先の、友人の、地域の、
生徒の、子の、孫の、隣人の、時代の　…　恩

「私を育てた縁」を「恩」と目覚めていくこと、
「自分探し」は、仰ぐことから始まります。

身を立て　名をあげ　やよ　励めよ

「私の思い」を大事に育んで努力することは大切です。
「思い通りにならない壁」に出会うために必要です。
「壁」の前で「縁」を「恩」と仰ぎ直すために重要です。

忘るる　間ぞなき　ゆく年月
今こそ　別れめ　いざさらば

別れても「恩」の中に生き続けるいのち。
こんな別れは、悲しいけれど嫌じゃありません。
『無縁社会』は、わがままな「私の思い」に縛られた寂しい社会。
「仰ぎ合う」で『無縁社会』を卒業したいですね。

●正信偈ノート①・よろこびの唄

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

響きに聞こえる声

皆様とご一緒にお勤めする正信偈の声が、だんだんと大きくなってきました。嬉しく頼もしく聴いています。その声に包まれて居眠りしてしまうことがあり恐縮します。けれど、皆様と共に安らげる時間を過ごせることを喜んでいます。

正信偈は、親鸞聖人によりご制作され、本願寺の蓮如上人によって出版・普及されました。以来五〇〇年を超えて読み伝えられています。歴史の中に、沢山の人々の悲喜の思いが想われます。

その響きに参加することを第一の心得とします。すると、私の心の強張った所がほぐされ、悩みや悲しみが溶けて流れる… 感じがします。『大悲の願い』『私がここに在る意味』が、だんだんと頷かれて来るのだと思います。

不可思議な救い

何が書かれているのですか？ と問われることがあります。書店に沢山の解説書があるので参考にして下さい、と逃げています。字句を追うだけの、うわべだけの解説で、「お伽噺ですね」と捨てられたら大変です。けれど、それぞれの戴きを伝え合うことも大事でしょう。だから、少しずつ書いていこうと思います。「詰まらない」となったなら、それは正信偈の責任ではなく、私の戴きの問題です。この戴きを問い続けることをお約束し、皆様には大事なお聖経を捨てないようにお願いします。

お聖経に向かう場合、私の諸問題の解決を求めるのではなく、問題だらけの私が、私自身がお聖経から問われていると、『問い』を受け取る態度で向かうことが必要です。その問いかけがハッキリすれば、問うている主体がハッキリします。主体は阿弥陀と名のられた法です。主体が、阿弥陀が如来してくる。それが救いだと聞きました。

この救いについて、私はまだ実感しておらず、自分の言葉になりません。例えばこんなことかなと想像します。

抱えきれない悲しみに座り込んだ人が、抱えきれないことを悲しんでくれる人に会う。励まされて悲しみの意味を問い直す。すると、悲しいことは変わらないけれど、その悲しみに支えられて立ち上がる。その悲しみとともに歩み始める。

「私が納得して救われる」のではなく、「納得できないままが頷かれてくる」という救い。理論・理屈・言葉が及ばないので不可思議の救いと云われます。

親鸞聖人がそんな救いに遇われた。その喜びを詩の形で表現されたのが正信偈です。理屈を訊ねるのではなく、喜びに共感することを第二の心得とします。解説書を読む場合もこの態度で向かいます。

主となるものを問い直す

念仏申す時には「私の願いはワガママ」と思って下さい。例えば、我が子の幸せを願ったとしても、私中心になってしまいます。煩悩から離れることのできない私。その願いは煩悩の塊です。それが煩悩だと肝に銘じても、すぐに忘れてしまう私。せめて思い出せるようにしておきたいです。

『私の願い』は人生の船頭となりません。では何を船頭とするのでしょう？ この問いを保つことを第三の心得とします。

正信偈では、お念仏よりもっと具体的な字句が並びます。三つの心得を灯として、大切なお聖経にチャレンジします。

次回は、名前の由来「正信ということ」から始めます。

長い道程になりそうです。

「月のウサギ」

お釈迦様の前世の物語として、インドに古くから語り継がれているものをジャータカと総称します。その中に「兎の施し」という物語があり、卯年なのでご紹介します。

昔、お釈迦様はウサギとしてお生まれでした。
ウサギにはサル・ヤマイヌ・カワウソの友達がありました。
四頭の獣たちは、ある日相談をします。
明日の精進日には、それぞれ行者に施しをしよう。
次の日、獣たちはそれぞれ施し物を用意して行者を待ちました。
サルはフルーツを、ヤマイヌは肉や穀物を、カワウをは魚を…
ところがウサギの食べ物は野の雑草です。行者には施せません。
しばらく考えて良いことを思いつきました。
夕方になり、ウサギは行者を見つけて言いました。
「行者さん、火をくべて下さい、きっと御馳走を施します」
行者は大きな火を熾しウサギを呼びました。
するとウサギは「焼けたら召上れ」と言い残し、
火の中に跳び込みました。
けれど炎は、ウサギの身体を毛ひとすじも焦がしません。
行者は実は帝釈天で、ウサギの覚悟を試しにきたのでした。
帝釈天はウサギを褒め、その姿を月に写しました。
このウサギの徳が、世の人々のあいだに記念されるように、と。

献身しなければならない状況は悲しいですが、
献身の対象が見つからないのも寂しいです。
満月の中でウサギが問いかけます。
その人生は充実していますか？

「東日本大震災」

大災害を目の当たりにして
個々の営みの小さいこと・儚いことを実感しました
私の上に起きた時　やはり納得することはできないでしょう

けれど
大悲の営みはもっと大きい
瓦礫の中から立ち上がってくるいのちがある
そのことを信頼して
ともに生きていこうと思います

■ 行事予定 ～平成二十三年四月以降～

六月　未定　**夕方法話会**
昨年好評だった法話会です
詳細未定ですが、
大人の紙芝居など考えています

九月　二十四日（土）　**秋季彼岸・永代経法会**
恒例の彼岸の法会です
法話　戸田　恵信　師

十一月　三日（木・祝）　**高田本山団体参拝**
本山の納骨堂法会に参拝します
市内・近郊の高田派寺院と共に
バスを借りての日帰り旅行です

平成二十四年

二月　十八日（土）　**報恩講**
十九日（日）
真宗寺院で一番大切な法会です
法話　戸田　信行　師

五月　未定　**高田本山・開山聖人七五〇回遠忌大法会**
一泊二日・バス旅行にての参拝です
詳細未定

先代住職の植えたしだれ梅が
綺麗に咲きました
今年は他の梅も沢山の花を付けました

‡ 後記 ‡

○便利な道具も『無縁社会』を加速しているように思います。

○例えば携帯電話。私が学生の頃は、こんな通信手段はなく、女の子に連絡するには、自宅に電話するより他にありませんでした。お母さんが出るかもしれない、お父さんが出たらどうしよう…ドキドキしながら、彼女を守る人達の思いを感じていました。携帯電話があれば、お付き合いはもっと軽快だったと思います。けれど、相手の背景を見失った中では、本当に付き合ったことになるのかどうか疑問です。

○例えばカーナビ。私は方向音痴なので、これがないとお参りに行けません。大変便利で重宝しているのですが、道を尋ねることがなくなりました。スゴイ美女と出会えたかもしれないのに。

○例えばコンビニ。深夜でも開いています。おかげで、隣のお姉さんの所にお醤油を借りに行くことができなくなりました。あまりにも便利なので、お金とコンビニさえあれば、小学生一人でも生きていけると錯覚してしまいます。

○ゲーム・パソコン・インターネット…、便利な道具は快適な生活を提供しますが、快適だからこそ見失ってしまうことがあります。

○ご飯を炊くのも、お風呂を沸かすのも、洗濯をするのも…、大変手間のかかった時代があります。家族や地域が協働しなければ生きていけなかった。そんな時代の方が『私』が大きかったのではないでしょうか？　協働する全体を『私』としておれたように思います。

○便利な道具を捨てる必要はありません。協働しなければならない状況を必然とすればよいのです。少なくともそういう機会を大事にすること。例えばお祭りなどの儀式を…

○葬儀が簡素化していることも心配です。父の葬儀の時、沢山の人が駆けつけて下さいました。「こんなに沢山の人に支えられていたのか」と驚きました。

○お寺さんがお経を読むことよりも、そんな驚きの方が大切ですね。「何でも思った通り」では、生きている甲斐がありません。